慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	佐藤信彦先生を悼む
Sub Title	
Author	阿部, 隆一(Abe, Ryuichi)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	1977
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.14 (1977.) ,p.347- 351
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	森武之助先生退職記念論集
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000014-0347

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

佐藤信彦先生を悼む

元本文庫長佐藤信彦先生は、昭和五十二年二月三日夕、かねて入院中の世田谷の国立大蔵病院に於て道山に帰された。享年七十四歳。先生は明治三十五年五月、彦根藩出身の軍人であった父君が偶々勤務されていた島根県浜田に生れ、大正四年宮城県立仙台第一中学校に入学、同七年東京の私立日本中学校第四学年に転校。同校校長杉浦重剛翁の先生に与えた感化は極めて大きく、先生はよく私共に杉浦先生のことを語られた。同九年同校を卒業し、同年慶応義塾大学文学部予科に入学、同十三年本科国文学科に進み、折口信夫教授の指導の下に、昭和二年卒業。先生は在学中受講された哲学の川合貞一先生、当時講師であった美術の田中豊蔵先生、民俗学の柳田国男先生を終生敬慕してやまなかった。卒業後、直に慶応義塾大学予科の国語教員に任ぜられ、昭和二十四年文学部教授となり、四十五年三月定年退職に至るまで四十三年間、一意慶応義塾に職を奉じて、定年後も昨五十一年三月まで講師として大学院の講義を担当された。退職後三年間鶴見女子大学文学部日本文学科にも出講された。

専攻の国文学上の先生の業績は言うまでもないが、戦前は少壮の予科教授として、その豊かにして広い教養は青年の心に生涯の叡智の源を与え、戦後は長年国文学科の主任教授であった折口先生の後をうけて、新学制下の国文科の基礎体制の樹立に苦心された。此等教職上の功績の外に、塾内外の学校行政の面に於ても先生の貢献は大きい。昭和十八年に藤山工業図書館の事務監督・主事を兼務されたが、さらに二十年、工学部事務監督も兼ね、戦災によって壊滅的打撃を被った工学部再建の難業を二年間執掌された。その後、文部省から大学学制改正の所謂新制大学発足に伴

う各種の委員を委嘱され、昭和廿七年六月には大学基準協会の事務局長にあげられ、全国の大学長の寄り合い世帯たる同会の運営を周到慎密に進めて、名事務局長の声華を高くして三十二年七月退かれた。その後も引き続き同協会や文部省の大学関係の各種の委員会の委員を委嘱された。

先生が大学基準協会を退かれた頃のある夕、田町駅への帰りによく私共と寄られた機械会館に数名を誘われ、先生は基準協会をやめられた旨をつげられ、私共は一斉に先生が俗務から解放された喜びに歓声をあげ、先生亦満面の笑みをたたえて一気にジョッキーを干された。先生が酒盃を進んであげられることは絶えて見ざる所であった。かかる健康な先生の顔容に接する最後になろうとは当時予想もし得なかった。翌三十三年九月先生は俄に心筋梗塞の発作に襲われ、その容態は憂慮すべきであったが、幸に一ケ月程の療養後恢復に向われた。しかし此より前に夫人は既に病床に臥しておられ、以後二十年にわたる御夫妻の闘病生活の後半生が始まるのである。御子様のない病身のお二人の御生活の難渋は想像に余りある。先生は傍から見れば、こうまでしなくともと思う程細心兢兢節制につとめて、些かもその端然たる生活態度を崩すことなかった。これ人の容易になし得ることではない。

先生と我が文庫との関係は深い。曾て麻生太賀吉氏が財団法人斯道文庫を設立したのは、亡き恩師河村幹雄博士を追慕記念するのが動機となったのであるが、先生は河村博士の遺稿「名も無き民の心」を夙に高く評価され、学生の私共に推奨され、巻頭の博士の遺影を指して此こそ真の哲人、真の求道者の風貌と慕われ、此に比し羅馬法王の顔は如何に俗臭なるかと語られたことがあった。勿論その頃斯道文庫に私が関係し、その文庫が塾に来るということは夢想だにしなかった。昭和三十年頃麻生氏から斯道文庫寄贈の申し入れがあり、それに応じて文庫を中心とする研究所創設を主唱したのは当時の図書館長野村兼太郎博士であった。塾財政の理由でそれが難航している期間中、先生も亦陰に陽にその促進に尽力され、その効あって高村塾長の時漸く創設が決定されて設立準備委員会が成るや、委員とし

て活発に議を計り、構想を練られ、現在の文庫の骨格構成には先生の規画に負う所が極めて多かった。三十五年臘月文庫の発足と共に文庫運営委員会委員に任ぜられ、昭和三十九年塾に定年制が実施されて初代文庫長松本芳夫先生が退職されたのに伴い、四月文庫長に選任され、四十三年九月まで二期文庫長を兼務され、その後四十五年三月定年退職まで文庫運営委員会委員、退職後は文庫顧問に推された。

文庫長としての先生の方針は、研究所はその性格上その成果をあげるに至る迄には長年月を要し、創立早々の文庫としては先ずその根基を深く固め、後世範となるべき学風を涵養することにあったと推察する。先生は常に大道を踏んで規矩を堅くとり、事を図かるに慎微、事を行うに厳正、一時の苟且に利を収め些事の一端に便を得るも、将来大局に禍殃を残す疑懼ある如きは微塵と雖も容赦されなかった。それが学者の態度かとは先生のよく発せられた叱言であった。私共に強く求められたのは学者たる態度であった。先生は文庫の研究事業の根幹をなす図書の博捜調査とそのマイクロフイルムによる複写撮影については、文庫員がその全力を集注すべく、後世初期の文庫員達は研究もせずにカメラをかついで全国を歩き廻ったにすぎぬではないかと嘲笑されるならば諸君以て瞑すべしとまで言われた。但しかかる書誌調査作業が単に職人的技巧にとどまり、或は好事家的嗜玩に流れることを排し、緻密なる考証を積み重ね、斯の道の名に恥じぬ高邁なる学風を求められた。人文科学の研究はその性格上その結実を見るには長年月を要し、妄りにその完成期限を附し得ないものである。それだけに十年一日の如く同じ仕事に携わる研究員には不断の自省自律の態度と強烈な意志力の持続とが要求される。従って此は本文庫に限らず、人事交流の殆どない研究所の最も悚るべきは気風の沈滞にある。先生が文庫に対し絶えず憂虞されたのはこの点にあった。私共に些かの惰偸の兆朕を看取されるや、やんわりと警策を下されること再三にとどまらなかった。しかし先生の文庫に対する愛情と期待は深くして大きかった。先生が帰宅後よく話されたのは文庫のことであったとして、夫人から香典返しに特に文庫を指定

して図書費の御芳志を賜ったことは御期待に応えること余りにも乏しき私共の感佩に堪えぬ所である。先生の文庫長時代の指針は直接先生の膝下に侍した私共のみならず、今後の文庫員たる者も永くこれを紳に書して肝に銘すべきであろう。

先生は聰明慧敏、論理明晰、洞察力極めて鋭く、清冽端雅の生活を希われた。先生は学者としては厖大な資料を駆使し考証を尽せる学匠沙汰の論考は終に発表されなかったが、その叡智より滴瀝せる論説は人の意表をついて事の本質に直入して機鋒縦横、将来無限の研究を誘導する底の暗示に富む珠唾であった。先生の教養は広く、学術文化のみならず、世故俗用にもわたったが、所謂博学というよりは、達識と言うべきである。先生は最も正しく十全なる意味に於ける批評家であった。諸般に対する見識は高く、時宜に適っておられた。先生は批評の意義と価値を時として力説されることがあった。先生が専門の国文学に於てのみならず常に人生に探求されたのはその思想と美であった。

誰しも先生に慊らなかったのは、論文はおろか随想小品の類もなかなか発表されぬことであった。いくらせがんでも紙の無駄とか何とか笑いまぎらわされるばかりで、僅か発表されたのはよほどの義理に縛ばられて書かれた小篇である。先生は物を書くのがあながち嫌いではなく、書信は几帳面で、簡潔明達の名文を綴り、日記や手記は欠かされなかったようで、詩は「ばさら詩抄」と題して、伍堂山平の匿名で昭和四十四年秋自家版を刷って知友に配られた。学生時代からの生涯の親友たる菅沼貞三先生が追悼文に記るされた如く、菅沼先生も随分執筆を勧められたが教育と講義に全力投球すると語って終に肯ぜられなかった。先生の行状を記して先生をして読者に一個厳格な道学者の如く映ぜしめたかもしれぬ。それは私の拙き筆のしからしむる所で、先生は実は円転滑脱、その最も疎まれたのは独逸流の観念哲学の硬直せる厳蕭形式主義であった。現実の流れに即せる生命のしなやかさを持たれたしゃれ者であった。先生は座談の名手で、人を見て法を説き、話題は多種、妙趣尽きずして極めてエスプリに溢れていた。先生の風

発に新な刺戟をうけて生彩の気の昂まるのを毎に覚えたものである。

私事にわたるが、先生は私共の慶応義塾予科三年間の国語の授業を担当され、二年の時は私共文Aのクラス担任でもあったから、先生との接触は深かった。先生の講義の魅力に惹かれ、一年の時の、恐らく秋であったか、友人と共にお宅に初めて上った。爾来門を叩くこと屢次、否、何のかんのと常時おしかけたと言うべきであろう。昼食を供され、興はつきず、奥様のお手作りの夕食を御馳走になり、先生の談論に聞きほうけ、私共亦黄吻泡を飛ばして終電車に辛うじて飛び乗ったことが幾夜あったであろうか。此は私共ばかりではない。当時先生は学生の訪れる数の最も多い予科教員であったと思う。入りびたりの友人の一人は内弟子と自称した。そしてそれは予科の間ばかりでなく学部に進んでも、卒業後もさすが回数こそ違え、同様であった。先生に私共が接した時は先生が教師として十年余の経験をつまれ、四十前後の壮年時代で、御夫妻とも健康な盛りであった。私共はかかる幸運にめぐり合せたのである。何によらず私事の瑣屑に至るまで先生に愬えて示教を仰がしめる、私共を常に惹きつけてやまぬ魅力が先生にはあった。省ると、先生の懐に飛びこんではただ愚痴をこぼし、先生に接しただけで悟りを得た様な一種解脱の気分になって、ただ甘えていたのが私共である。達士というべき先生は私共にとっては単に一技一藝の師ではなく、人生の教師であった。先生に対する時、私共は鬢に霜を置き、禿翁になろうと、いつも慶応義塾予科一年坊主である。

阿部隆一謹識